

総合周産期母子医療センター新生児科

2017年度総入院数は424人(前年比+14.31%)であった。入院の内訳は、在胎週数が未熟で出生体重の小さい超低出生体重児(出生体重1000g未満)が54人(前年度より+39人)、極低出生体重児(出生体重1000-1500g未満)が36名(前年度より+10人)、低出生体重児(出生体重1500-2500g未満)が117名(前年度より+24人)であった。超・極低出生体重児は合わせて総入院数の21.2%であった。在胎期間別内訳は22-24W:19名、25-27W:24名、28-30W:34名、31-33W:55名、34-36W:53名、37W以上:239名であった。重症新生児仮死や遷延性肺高血圧症、胎便吸引症候群、重症新生児仮死などの出生体重2500g以上の児は217名で総入院数の51.2%であった。

さいたま赤十字病院産科からの入院は214件で、総入院数の50.5%であり、分娩立会い件数は179件で総入院数の42.2%であった。院外からの新生児搬送入院は210件で、新生児ドクターカーによる院外新生児搬送件数は46件であった。

特殊治療としては人工換気療法182件(入院患児の42.9%)、サーファクタント補充療法75件、一酸化窒素吸入療法16件、脳低温療法13件、脳平温療法16件、血液透析5件、ECMO1件、であった。

死亡数は9名で剖検率は25.0%であった。染色体異常・奇形症候群などで死亡したのは7名(18torisomy:2名、新生児ヘモクロマトーシス:1例、肺低形成:1名、先天性心疾患:2名、先天性横隔膜ヘルニア:1名)で、それ以外で死亡したのは2名(ELBW、Sepsis)であった。死亡率:在胎期間別22-24W;5.3%、25-27w;12.5%:出生体重別~499g;0.0%、500-999g;5.7%、1000-1499g;5.6%。

2017年度在籍医師 常勤医(12名):清水正樹(総合周産期母子医療センター長、新生児科部長兼科長、日本小児科学会専門医、日本周産期・新生児学会専門医)、川畑 建(副部長、日本小児科学会専門医、日本周産期・新生児学会専門医)、菅野雅美(医長、日本小児科学会専門医、日本周産期・新生児学会専門医)、閑野将行(医長、日本小児科学会専門医、日本周産期・新生児学会専門医)、閑野知佳(医長、日本小児科学会専門医)、佐伯久子(医長、日本小児科学会専門医、日本周産期・新生児学会専門医)、今西利之(医長、日本小児科学会専門医、日本周産期・新生児学会専門医)、芳賀光洋(医員、日本小児科学会専門医)、柏 直之(医員、日本小児科学会専門医)、小林早織(医員、日本小児科学会専門医)、西岡真樹子(医員、日本小児科学会専門医)、稲毛由佳(医員、日本小児科学会専門医) 常勤的非常勤(4名):角谷和歌子、新垣真由美、小出健太郎、後期研修医(4名):須貝太郎、笠原大海、伊藤律子、横松知咲子、堀口明由美、さいたま赤十字病院初期研修医(2名):土屋 雅、久保田未由